様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　５ 月 ２６ 日現在

機関番号：１３３０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2022
課題番号：１９Ｋ００７０６

研究課題名（和文）パブリックスピーキングにおける「説得」のマルチモーダル分析

研究課題名（英文）Multimodal analysis of 'persuasion' in public speaking

研究代表者
深澤　のぞみ（Fukasawa, Nozomi）

金沢大学・人間社会研究域・客員研究員

研究者番号：６０３１３５９０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、パブリックスピーキングにおける「説得」について、スピーチの内容に加え、非言語行動も含むマルチモーダルな分析をするための項目を抽出し、分析方法を検討した。また、パブリックスピーキングの指導について、国内外の日本語教師に調査し、特に非言語行動については、指導項目や評価方法が確立されておらず、見解も多様であることが明らかにした。さらにコロナ禍のために計画を変更し、パブリックスピーキングの対面状況とオンライン状況に見られる「説得」の特徴の異なりを分析したが、オンライン状況でのパブリックスピーキングは、対面状況での代替ではなく別のものであり、説得の手法も各々異なる可能性が明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
パブリックスピーキングにおける「説得」の要素について、言語面での特徴に加え、非言語行動も含めた観点で検討したことは、大きい意義があると思われる。また対面状況とオンライン状況におけるパブリックスピーキングを比較したところ、オンラインによるパブリックスピーキングは、対面状況でのパブリックスピーキングの代替物であるとは言えない可能性も明らかになった。これについては、まだ十分に検証するところまでは到達していないが、ポストコロナ時代のコミュニケーションを考えるためのきっかけとなると思われる。

研究成果の概要（英文）：　The purpose of this study is to clarify, based on a multimodal analysis, what "persuasion" is in public speaking.
In this study, we extracted items for multimodal analysis of "persuasion" in public speaking, including the content of speech as well as nonverbal behavior, and examined analysis methods. We also surveyed Japanese language teachers in Japan and abroad on public speaking instruction, and found that there were no established the contents of teaching or assessment methods for non-verbal behavior in particular, and their views varied. In addition, we changed our plans because of the pandemic and analyzed the differences in the characteristics of "persuasion" between the face-to-face and online situations of public speaking, revealing that public speaking in an online situation is not an alternative to the face-to-face situation, and that each method of persuasion may be different.

研究分野：日本語教育

キーワード：パブリックスピーキング　説得　言語行動　非言語行動　マルチモーダル分析　対面によるパブリックスピーキング　オンラインによるパブリックスピーキング

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

本研究は、公的な場で、情報や考えを他人に伝えるパブリックスピーキングにおいて、いかに他人を納得させるか、すなわち「説得」がどのようなプロセスで実現するのかについての統合的な分析を行うものである。グローバル化社会である現代において、自分の持つ情報や知識を他人に効果的に伝えることは重要なスキルである。その代表となるのがパブリックスピーキングである。

パブリックスピーキングでは、単に内容のあるスピーチをしたからよいわけではなく、伝えたい内容そのもの、伝え方の言語的ストラテジー、さらに非言語面の行動がそろって「説得」が成功する。そしてこれらの特徴について総合的な分析を行い、初めて説得の全体像が明らかになるのである。そこで本研究では、パブリックスピーキングのマルチモーダルな分析と検証を行うことを目指す。マルチモーダルというのは、言語と非言語、さらには環境などの要素を総合的に分析する研究アプローチを指しているが、本研究ではこの分析の手法の検討から具体的なデータの分析、そして、言語面と非言語面を統合的に盛り込んだモデルを構築し、さらには日本語教育やグローバルコミュニケーションなどの分野の研修などへの応用方法の提言なども行うことを目標とする。

本研究に携わった研究者らは、日本語のパブリックスピーキングについての研究を継続して進めてきた。これまで H22 年度科研（課題番号：22520525）（以下、H22 科研のように略記）および H25 科研（課題番号：25370585）においてパブリックスピーキングの様々なジャンルとその性質の異なりを明らかにしてきた。そして H28 科研（課題番号：16K02807）では、パブリックスピーキングにおける「説得」が成功する要因と説得プロセス全体を分析することを目指し、具体的には「全国大学ビブリオバトル」全国決勝戦のデータを用いて、ビブリオバトルのスピーチ内容と聴衆への働きかけのストラテジーの双方を分析することで、説得が成功する際のパターンを明らかにした（深澤他（2018））。すなわち話し手が聞き手と情報を理解する基盤を共有するような発話を行なった上で、スピーチの中では、この内容を保持しさらには途中でその内容を覆すなど、聴衆の印象に残りやすいスピーチの構造を持っていることなどがわかった。その上で日本語教育でのスピーチ指導などでも、どのようにしたら聴衆の印象に残る話ができるかを学習者に考えさせることの必要性を主張した。さらに言語行動だけでなく、非言語行動の観察も必要だとの考えから、非言語行動の観察の方法を検討し、具体的な分析を本科研である次の H31 科研（課題番号：19K00706）の研究で行うこととした。

具体的には、日本語のパブリックスピーキングの映像を、アノテーションツールである ELAN を用いて分析を行い、さらに実験的手法を用いて説得の成功要因の検証を行うことを目指した。この分析で得られた知見は、効果的に相手を説得するための方法として、日本語教育分野やグローバルコミュニケーション分野に寄与できるものと思われる。

なお、本研究を開始して約 10 ヶ月後の 2020 年から新型コロナウィルス感染症の拡大（以下、コロナ禍と略記）と、いったん収まってもまた再燃することの繰り返しにより、2 年目以降の研究の目指すゴールや計画を複数回変更せざるを得なくなった。この内容については、以降必要に応じて、詳細を述べることにする。

２．研究の目的

本研究では、後述するように、パブリックスピーキングにおいて説得がどのように成功するのかを、マルチモーダル分析を通して重要と思われる要素を多角的に抽出しようとしている。

本研究で具体的に目指していたのは、以下の項目である。

1）パブリックスピーキングの説得プロセスについて、言語面の要素は平成 28 年科研で、説得に成功したスピーチは聴衆と理解基盤を共有した上で、聴衆の予想を裏切るような展開をし、それを効果的に伝えるストラテジーが多く取られていることなどを明らかにすることができた。その上で検討した、非言語行動を含めた説得プロセス全体を分析するための手法を用いて、実際のパブリックスピーキングのデータで非言語面も含めた特徴を抽出することを目指した。ここでは同時に、文化背景の違いが説得の効果に影響を与える可能性があるため、それについての調査も行うことにした。

2）対照実験を行い、1）で抽出した特徴の検証を実験的手法により行う。具体的には、例えば視線行動に関して説得に成功したパブリックスピーキングに特徴的な要素が抽出されたとしたら、その要素を含んだスピーチと含まないスピーチとを実際に聴衆に聞いてもらい、評価をしてもらうなどの実験を試みる。その上で、説得プロセスの全体像を明らかにし、それをもとにモデル化を行う。

3）モデル化した内容を、日本語教育や異文化コミュニケーション教育における教育や研修の内容の提案を行う。

本研究は大きく分けて、「説得」のマルチモーダル分析と、実験的手法による検証、そして日本語教育やグローバルコミュニケーションにおける研修や教育への提言の３つの部分に分けられる。

前述したように、コロナ禍の影響により、実際に実施した研究は以下のような内容に変更された。上記１）についてはこのまま実施できたが、2）については移動や集会が禁止されたことにいより、実施ができなかった。そのため、3）の日本語教育や異文化コミュニケーション教育へのパブリックスピーキングにおける非言語行動の指導についての意識調査を、海外の研究協力者とともに行い、教育の担当者の意識を探ることを先に行うことにした。その後、コロナ禍が断続する状況となったため、2）の実験的手法で説得プロセスの全体像を明らかにすることは断念し、新たな視点として、対面状況とオンライン状況でのパブリックスピーキングの説得に関する手法の比較を行うことに計画を転換した。

これらをまとめると以下のようになる。

①パブリックスピーキングの説得プロセスについて、実際のパブリックスピーキングのデータで非言語面も含めた特徴を抽出することを目指す。

②パブリックスピーキングについての指導、特に非言語行動も含めた指導について、国内外の日本語教育関係者に対する意識調査を実施する。非言語行動に関する意識や評価、文化差などを浮かび上がらせることを目的とする。

③パブリックスピーキングにおける説得プロセスについて、対面状況とオンライン状況とで、それぞれどのような特徴があり、両者に異なりがあるのかを調査する。

３．研究の方法

本節からは、研究開始当初の計画ではなく、2. で述べた修正された計画による研究の方法について述べていく。

まず①では、パブリックスピーキングの説得プロセスについて、実際のパブリックスピーキングのデータで非言語面も含めた特徴を抽出することを目指す。研究手法としては、「全国大学ビブリオバトル」の決勝戦のデータを用いて、アノテーションツールである ELAN を用いて分析を行い、分析を行う。非言語行動も含めた分析方法については、H28 科研において、すでに検討を開始しているが、この検討手法を継続し、改善しながら、分析を続ける。

次に②のパブリックスピーキングについての指導、特に非言語行動も含めた指導に関して、国内外の日本語教育関係者に対する意識を調べるために、海外の機関で日本語教育に携わっている研究協力者などと連携し、非言語行動に関する意識や評価、文化差を明らかにするために、ネット上での調査を実施する。さらに、この結果をもとに、日本語教育やグローバルコミュニケーションなどのためにどのように教育や研修の可能性があるかを検討する。

長引くコロナ禍のために研究計画の変更を余儀なくされた③では、パブリックスピーキングにおける説得プロセスについて、対面状況とオンライン状況とで、どのような特徴があるかを検討することを目的とする。「全国ビブリオバトル」では、オンラインで実施されたデータも公開されており、これを用いて、比較と検討を行うことにした。

４．研究成果

(1) パブリックスピーキングの説得プロセスにおける非言語行動の特徴の抽出

パブリックスピーキングの説得プロセスにおける非言語行動の抽出については、H28 科研の成果の１つである深澤（2019）で、ビブリオバトルの大学決勝戦の録画データから言語面と非言語面の双方を抽出しマルチモーダルな分析を行うための方法を検討している。これによると、非言語行動としては、視線行動、ジェスチャー、うなずきと笑いが主なものとして抽出されることがわかった。

まず視線行動については、聴衆を目の前にしたパブリックスピーキングでは、正面を見据える、左右を見回す、聴衆以外の方向を見る、さらに原稿を見る、という４つの種類に分けられた。大抵の場合、まずパブリックスピーキングの中心から正面を見据えるのが初期位置となり、その後、聴衆全体に視線を配りながら話を進めるのが普通である。時々、原稿を置いた演台などを見ることもあるが、原稿だけを見るのは良くないとされることが多いだろう。特徴的であったのは、あえて聴衆から視線を外し、別の場所を見る、という視線行動をする場合である。話し手が自分の中で何かを考えたり思い出したりするような場面であったり、遠くを見て聴衆を違う場面に誘おうとしたりする場合である。スピーチは、本などと異なり読み返すことができないものであるので、自分の話から聴衆の気を逸らさず、印象に残そうとすることを目指す視線行動であると言える。

ジェスチャーについては多岐にわたるが、大きく分けて、手のひらを広げるもの、指を使うもの、こぶしを作るもの、腕全体を使うものに分かれる。胸に手のひらを当てて自分や自分を含む全体を示しているものが見られた一方、聴衆や「皆」を示す場合には、手のひらを逆ハの字に広げた動作などが観察された。指を使う動作は、数え上げる時に多く見られた。

うなずきや笑いについては、個人差が大きく、特にうなずきの認定については、もう少し観察や議論が必要だとしている。

前述してきたように、コロナ禍のためにオンラインによるイベントが急速に普及した。以前から YouTube 等での動画によるスピーチの配信はよく行われていたが、これまで一般的に対面で行われていたイベントがオンラインで実施されるようになったのは、コロナ禍を契機としている。そこで対面状況のパブリックスピーキングとオンライン状況でのパブリックスピーキングについて、主に非言語行動のどのような異なりがあるかを調査した。

ビブリオバトルの場合、対面であろうとオンラインであろうと５分間でおすすめの本について話すというテーマは同じであるので、言語的な内容にはそれほど変化がないはずである。しかし聴衆が目の前にいるか、あるいは画面を通してしか見えない、あるいは全く自分には見えないという状況であるため、非言語行動は大きく影響がある可能性がある。このような問題意識を持ち、深澤他（2023）の研究は行われた。

本研究では、対面で行われた「全国大学ビブリオバトルの決勝戦（2019 年）とオンラインで行われた「全国ビブリオバトル」の決勝戦（2020 年）の動画データを、それぞれ ELAN を用いて分析した。基本的には上述した深澤（2019）で抽出された非言語行動の種類を基に分析を行ったが、オンラインデータについては、様々な制約があり対面のデータと同じように観察することは不可能であることがわかった。その１つは視線行動である。対面の視線行動は目の前の聴衆にどのように視線を配分するかが重要であるが、オンライン状況の場合は、あくまでも PC などの Web カメラを通して視線を聴衆に送ることになる。それをどのように評価するかがまず重要なポイントになる。またジェスチャーについても、オンラインでのスピーチにおける非言語行動は、基本的には上半身の顔周りが Web カメラに写り、PC の画面に収まる範囲しか聴衆に見えないという制限がある。このことは、聴衆から話し手の行動のほとんどが見え、しかし一方では聴衆と話し手の距離がある場合は細かいことは見えないという、対面での観察とはかなり異なる特徴であり、十分に考慮しながら分析をする必要がある。これらのことを検討した上での分析により、以下のことが明らかになった。

まずビブリオバトルの対面でのスピーチについては、深澤（2019）に見られたジェスチャーと比較し、それほど多くの種類は見られず、それよりも自分がお勧めする本を手に持ったり、台上にある本を指し示したりするジェスチャーが多く見られた。これはビブリオバトルのトピックの性質を考えると当然の結果かもしれない。聴衆に質問をして挙手をさせるために自分も手を挙げる動作などは、ビブリオバトルに投票が伴うものであり、なるべく聴衆の印象に強く残すことを目指して行われている動作と見るべきであろう。視線行動にはそれほど多くの種類はなく、正面を向くか、全体を見渡すか、聴衆から大きく視線を外すかなどである。これはビブリオバトルに限るものではないが、ビブリオバトルに特有なのは、自分が勧める本を聴衆に提示する際に、自分の視線もその本に向けることである。聴衆に本を提示するだけでも済むような行動だが、話し手自身の視線を向けることで、聴衆の視線もそこに集め「共同注意」と呼ばれる行動を促していると考えられる。ビブリオバトルの対面でのスピーチにも、アクションの大きさについては個人差はあるものの、聴衆への働きかけを目指したと見られる非言語行動がいくつも観察されることがわかった。

次にビブリオバトルのオンラインでのスピーチについての分析結果を述べる。上述したように、オンライン状況でのスピーチは、視線を送る先が聴衆に直接ではなく Web カメラ越しであることや画面の大きさの制約でジェスチャーなどが見える範囲が限られることなど、対面状況とは異なる特徴がある。一方で、Web カメラを意識し覗き込むような視線行動を行った場合には、画面を見ている聴衆にはかなり大きい印象を与えることもある。これらの特徴に留意しながら分析を行ったところ、話し手が画面にどのように映し出されるかを意識した非言語行動が見られることがわかった。画面上で見えやすい顔周りのかなり高い位置で手のジェスチャーが行われる例や、Web カメラに本の表紙を近づけて大きく映し出す例などである。視線行動は、オンライン状況ではかなり観察がしにくい実状もあった。対面状況では正面や聴衆を見渡すという視線行動がよく観察されたが、それに該当する視線行動としては、Web カメラを含む画面を見ているものである。対面状況と最も異なるのは、自分を含めた聴衆全体を見ることになることである。またそれもオンライン会議システムの設定や主催者のルールによって、聴衆がビデオオフにすれば、黒い四角が画面に並ぶような画面を見ていることになる。対面とオンラインとでかなり異なる点である。今回の研究で分析したデータの中には、オンラインでありながら、話し手が使用している PC の画面の向こうに実際の聴衆がいて、その聴衆を前に話しているケースがあった。興味深いことに、これが自然な印象を受けるかというとそうではなく、単に中継画面を見ているだけで、他のデータのように聴衆に直接語りかけるような印象は得られにくいことがわかった。これは、対面状況とオンライン状況とでは、特に非言語行動に関しては、それぞれに適合した戦略的な働きかけを行う必要があることを表す例であろう。

（2）パブリックスピーキングについての指導や日本語教育での位置付けについて

本科研研究では、説得力のあるパブリックスピーキングとはどのようなものかを明らかにしつつ、日本語教育やグローバルコミュニケーションの教育の中でどのように扱われるべきかについても検討することを目的の１つに掲げている。そのため、外国人日本語学習者対象の日本語教育にあたっている研究協力者とともに、パブリックスピーキング教育の経験のある日本語教師を対象に WEB アンケート調査を行い、その結果をまとめた。

日本語教育では、ディスカッションやディベート、スピーチ、アカデミックプレゼンテーションなどのパブリックスピーキングの教育は従来から重視され、熱心に教授されてきている割には、意外に非言語行動の位置付けや評価方法、文化差など、焦点があまり当てられていないのが事実である。

深澤他（2021）では、この問題について検討し、これまでほとんど調査されてこなかったパブリックスピーキングにおける非言語行動についての日本語教師の意識調査を実施した。パブリ

ックスピーキングの指導を行ったことのある日本語教師（母語話者、非母語話者どちらの日本語教師も対象）に、国も教育機関も限定せずに調査への協力を依頼し、最終的に 38 人の教師が調査の対象者となった。

非言語行動の指導については、全く指導をしないと答えた教師はなく、何らかの形で指導を行っていることがわかった。この中で最も多いのは「視線」に関する指導であった。しかし一方で、非言語行動はスピーチコンテストなどでも評価の対象となっていないことも多く、むしろ、聴衆が不快感を持たないようにするためのマナーととらえる考え方や、学習者個人が元来持っている個性の一部だという見解も見られた。パブリックスピーキングの指導の中では、非言語行動についての指導は、スピーチの内容の指導ほどははっきりした指導項目が確立されておらず、評価の仕方などについての様々な考え方があることが浮き彫りとなった。

（3）対面状況とオンライン状況の違いが与えるパブリックスピーキングへの影響

パブリックスピーキングの説得と非言語行動との関係、さらには対面状況とオンライン状況とでの異なりについて、研究計画の変更のために必ずしも最初の計画通りのデータが得られたわけではないが、むしろ今後の研究の展開につながる結果が得られたとも言えると考えている。特に対面とオンラインと両者によるパブリックスピーキングで、同じような内容を伝えようとする場合でも、聴衆への効果的な働きかけの方法が異なる可能性が明らかになったことは、オンラインによるパブリックスピーキングが、対面のパブリックスピーキングの単なる代替物ではないことを表している。今後オンラインによるコミュニケーションがますます普及してくると思われる中で、これは重要な視点になるかもしれない。

この研究で分析したデータの中には、オンラインでありながら、話し手が使用している PC の画面の向こうにいる実際の聴衆を前に話しているケースがあり、単に中継画面を見ているような印象を持つことを前節で報告した。このことは、対面状況でのリアルな「今ここ」を、そのまま Web カメラを通して映像としてオンライン上の聴衆に届けたとしても、バーチャルの空間の聴衆の「今ここ」にはならないことを意味する。しかし一方で、対面状況とオンライン状況、つまりリアル空間とバーチャル空間とをつなぐ効果的な働きかけがあれば、リアルとバーチャルとを互いに行き来しながら、「今ここ」を共有できる可能性があるとも言えるだろう。その具体的な内容はまだ研究途中であるが、徐々に明らかにしていきたいと考えている。

コロナ禍以前から、大きい可能性を秘めたものとして認識されつつあったオンラインによるコミュニケーションは、コロナ禍を機に急速に一般に拡大していくこととなった。オンラインによるコミュニケーションは、単に便利だとか、対面でのコミュニケーションの代替手段に過ぎないということではなく、別の何かであるのかもしれない。コミュニケーションのための新たな空間デザインを考える際に、リアル空間とバーチャル空間のあり方、そしてその中で互いの「今ここ」を共有するための効果的な方策を見つけ出すことが、今後のポストコロナ時代のコミュニケーションには極めて重要なことになるのではないか。

＜引用文献＞

深澤のぞみ・山路奈保子・須藤秀紹、「日本語パブリックスピーキングにおける説得の特徴――書評ゲーム「ビブリオバトル」の観察から――」、『日本コミュニケーション研究』47(1) 、2018、pp.25-45

深澤のぞみ「日本語パブリックスピーキングの マルチモーダル分析のための予備的研究」、『金沢大学国際機構紀要』 (1)、2019、pp.99-113

深澤のぞみ・森本一樹・梅澤薫・根津誠「パブリックスピーキングにおける非言語行動の評価と教師の意識」『国際機構紀要』 (3) 、2021、pp.11-23

深澤 のぞみ・山路 奈保子・須藤 秀紹「オンラインによるパブリックスピーキングにおける非言語行動の特徴分析のための予備調査」『金沢大学国際機構紀要』 (5)、2023、pp.69-86

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計6件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　4件）

１．著者名 深澤 のぞみ ， 山路 奈保子 ， 須藤 秀紹	４．巻 5
２．論文標題 オンラインによるパブリックスピーキングにおける 非言語行動の特徴分析のための予備調査	５．発行年 2023年
３．雑誌名 金沢大学国際機構紀要	６．最初と最後の頁 69,86
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24517/00069313	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 山路奈保子・アプドゥハン恭子・因京子	４．巻 7
２．論文標題 中級レベル日本語学習者のゼミにおける議論参加の様相 －研究コミュニティへの貢献を可能とするための支援方法を探る－	５．発行年 2023年
３．雑誌名 九州工業大学教養教育院紀要	６．最初と最後の頁 19,33
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18997/00009102	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 坂本牧葉，須藤秀紹，野村松信	４．巻 70
２．論文標題 チームワーク形成ための協調課題の導入が分野横断型 PBL に及ぼす影響	５．発行年 2022年
３．雑誌名 工学教育	６．最初と最後の頁 107,117
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.4307/jsee.70.4_107	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 深澤のぞみ・森本一樹・梅澤薫・根津誠	４．巻 3
２．論文標題 パブリックスピーキングにおける非言語行動の評価と教師の意識	５．発行年 2021年
３．雑誌名 金沢大学国際機構紀要	６．最初と最後の頁 11-23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

１．著者名 大江元貴	４．巻 15
２．論文標題 今日紹介する商品はこちら。最新薄型テレビ！」：主題の導入を演出する定型表現	５．発行年 2020年
３．雑誌名 日本語用論学会第22回大会発表論文集	６．最初と最後の頁 17-24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 深澤のぞみ・深川美帆	４．巻 2
２．論文標題 学部留学生対象のパブリックスピーキング能力を育成するための実践活動	５．発行年 2020年
３．雑誌名 金沢大学国際機構紀要第２号	６．最初と最後の頁 61-73
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計9件（うち招待講演　6件／うち国際学会　2件）

１．発表者名 Kosei Furukawa, Madoka Takahara, Hidetsugu Suto
２．発表標題 Research on Supporting an Operator’s Control for OriHime as a Telepresence Robot
３．学会等名 International Conference on Human-Computer Interaction24 July 2021（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 深澤のぞみ
２．発表標題 日本語教師の実践力」を身につける！「議論の指導法」
３．学会等名 文化庁委託事業（全国日本語教師養成協議会）「留学生に教える日本語教師【初任】研修　（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 深澤のぞみ
２．発表標題 日本語教師の実践力」を身につける！「口頭発表の指導法
３．学会等名 」文化庁委託事業（全国日本語教師養成協議会）「留学生に教える日本語教師【初任】研修　（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 深澤のぞみ
２．発表標題 インクルーシブ社会に貢献する日本語教育を
３．学会等名 シンポジウム「金沢大学における日本語教育の研究・教育・実践」
４．発表年 2021年

１．発表者名 深澤のぞみ
２．発表標題 パブリックスピーキングと日本語教育
３．学会等名 インドネシア教育大学講演会「日本語教育における会話能力の向上」（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 深澤のぞみ
２．発表標題 日本語の口頭コミュニケーションの特徴
３．学会等名 中国南開大学外語学院講演会（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 深澤のぞみ
２．発表標題 ビブリオバトル　私の実践
３．学会等名 ビブリオバトル世界大会2019（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 山路奈保子
２．発表標題 読書体験をシェアする活動の実際
３．学会等名 令和元年度檜山管内読書活動活性化フォーラム兼渡島檜山管内図書館（室）職員等研修会（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 大江元貴
２．発表標題 「今日紹介する商品はこちら。最新薄型テレビ！」：主題の導入を演出する定型表現
３．学会等名 日本語語用論学会第22回大会
４．発表年 2019年

〔図書〕　計2件

１．著者名 深澤のぞみ・本田弘之編著	４．発行年 2021年
２．出版社 くろしお出版	５．総ページ数 175
３．書名 日本語を教えるための教授法入門	

１．著者名 近藤雪絵 ， 木村修平 ， 前田由紀 ， 辻大吾 ， 髙司陽子 ， 藤井数馬 ， 小田登志子 ， 江後千香子 ， 須藤秀紹 ， 益井博史	４．発行年 2021年
２．出版社 こどもの未来社	５．総ページ数 94
３．書名 英語でビブリオバトル実践集	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	山路　奈保子 (Yamaji naoko) (40588703)	九州工業大学・教養教育院・教授 (17104)	
研究分担者	須藤　秀紹 (Suto hidetsugu) (90352525)	近畿大学・情報学部・教授 (34419)	
研究分担者	大江　元貴 (Oe motoki) (30733620)	金沢大学・歴史言語文化学系・准教授 (13301)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
英国	リーズ大学	ダラム大学		
英国	リーズ大学	イーストアングリア大学		